

ヤングケアラーを取り巻く地域での横断的支援体制づくりに 関する研究

— 国による4つの支援策の現状把握の検討から —

森山千賀子・午頭 潤子・土川 洋子・杉本 豊和・田中 真衣・井原 哲人・
西方 規恵*・牧野 晶哲・増田 修治・富澤和歌子・沼田あや子**

研究実績の概要

2023年度は、以下の3点の学術研究と実践研究を行った。

第一は、2022年度に実施した「高等教育機関における学生ケアラーに関するアンケート調査」の分析を行い、第31回日本介護福祉学会大会、並びに白梅学園大学・白梅学園短期大学「子ども学研究所」による公開講座において口頭発表を行った。本研究の実施に当たっては、高等教育機関における学生ケアラーの存在は周囲からもあまり認識されていない状況であった。しかし、K市大学連携協議会参加校の教職員調査からは、回答者39名のうち17名が学生ケアラーを発見したことがあり、16件の学生ケアラーの事例が浮かび上がった。そのうちの5事例は、家族の中に就労している人がおらず、学生自身は複数の家族のケアを担っていた。つまりは、学業と複数者へのケアに加え経済的な問題もあり、重篤かつ複合的な課題を抱える学生ケアラーの存在が可視化されたと考える。また、本調査ではヤングケアラーに関する研修への参加者は6名であり、その6名全員が普段の活動を通して学生ケアラーを発見できると回答している。ヤングケアラーアセスメントツールの位置づけは、「こどもの状況に早めに気づけるようにする」(有限責任監査法人トーマツ2023.3)ことで

あり、ケアラーへの理解や早期発見・支援方法を学ぶ機会を高等教育機関においても設けていくことが重要になると考えられた。

第二は、上記のアンケート調査から、学生ケアラーの発見には、当事者からの発言が鍵という回答が多かったため、当事者が発言しやすい仕掛けづくりの一つとして、「ケアラーサロンin白梅」を立ち上げた。具体的には、学内でのフードパントリー開催日に大学3年生の専門ゼミナール活動の一環として(主に午頭・森山ゼミナール)、2023年6月から月1回のペースで開催した。毎月20分程度でプロジェクトメンバーが自身の研究切り口からヤングケアラーに関する話題提供を行い、ディスカッションの場を設けた。

第三は、昨年度から実施してきたインタビュー調査の協力者確保が難しいことから、研究倫理審査委員会に研究計画修正申請書を提出した。修正内容は、①2022(令和4)年度に東京都ヤングケアラー相談支援等補助事業を受託している団体を、東京都のHPより検索し、団体のHPより連絡先を把握する。そこからメールや電話番号を得た後に、調査の趣旨説明のために連絡を取り、インタビューへの協力依頼を行う。②①での協力の有無に関わらず、更にその団体よりヤングケアラー支援活動を行い本研究に賛同を得られそうな団体をスノーボールサンプリングにて抽出し協力を依頼する。2023年度末の段階で、4団体のインタビュー調査が終了し、現在も進行中である。

*子ども学部(～2024年3月31日)、嘱託研究員(2024年4月1日～)

**子ども学部(～2024年3月31日)、立命館大学(2024年4月1日～)

【引用文献】

- ・有限責任監査法人トーマツ（2023.3）『ヤングケアラー支援に係るアセスメントツール等の使い方ガイドブック』令和4年度子ども・子育て支援推進調査研究事業「ヤングケアラーの支援に係るアセスメントシートの在り方に関する調査研究」